

村串仁三郎著

『大正昭和期の鉱夫同職組合「友子」制度

—続・日本の伝統的労資関係—

評者：土井 徹平

I

近代の鉱山には、「友子」という、鉱夫（採鉱夫）たちの自治的な社会集団が存在した。友子は全国各地の鉱夫稼業を営む労働者により組織されており、その中で鉱夫たちは自らの技能を伝承し、また鉱山や企業の枠を越え、疾病に対する救済や職業紹介など様々な互助的活動を行なった。一方、友子は独自の制裁法を持っており、鉱山における生活・労働の規律化も担っていた。

友子の存在は歴史学者や社会学者の間では古くから知られてきた。しかし、労働者のインフォーマルな社会関係として成立した友子は文書に記録が残らず、特に明治期の友子に関する史料は限られていた。このため、比較的豊富な大正・昭和期の史料をもとに分析がなされ、全体のイメージが形作られてきたという経緯がある。

こうした友子研究の限界を克服すべく、自ら精力的に全国の旧鉱山地を巡り、各時代の友子史料を発掘・収集し、友子が成立し発展していった歴史的なプロセスを長年にわたって研究してきたのが、本書の著者である村串仁三郎氏である。

本書は、「続・日本の伝統的労資関係」とサ

ブタイトルがつけられていることからわかるように、1989年に出版された『日本の伝統的労資関係』の続編である。前著において筆者は、各時代の友子を鉱山業の発展との関連で分析することで、友子とはいかなる組織であり、それはいつ成立しかんして発展していったのか、体系的に明らかにした。

筆者によれば、友子とは、熟練労働者の養成、労働力の供給調整、職業上での疾病に対する扶助、鉱山自治など多様な機能を持つ、「鉱夫のクラフト・ギルド的な同職組合」であり、18世紀末から19世紀はじめに成立した。そして急速な発展を遂げていった明治期の鉱山において、友子は労務管理の不足・欠陥を補う集団として必要とされ、全国に伝播し発展していったという。

友子という労働者の自律的な社会集団の実態のみならず、近代の鉱山業がそうした集団に対し、積極的に依拠することで発展を遂げてきたという、近代産業の実態をも実証的に明らかにした『日本の伝統的労資関係』は、鉱山史にとどまらず幅広い分野で高い評価を受けることとなった。同書は、出版から約20年を経た現在もなお、労働に関する歴史を学ぶ者にとっての必読書となっている。

さて、前著が江戸末期から明治期の友子を対象とするものだったのに対し、本書『続・日本の伝統的労資関係』は、前著では論じられることのなかった大正期以降の友子の実態、すなわち近代鉱山業とともに発展を遂げた友子が、その後、大正・昭和の時代を経て、再編され変質し、そして衰退・消滅していった過程が明らかにされている。具体的に本書の内容を紹介・検討する前に、まず本書の構成を示しておこう。

II

序章 「友子」研究の方法と課題

第一章 大正昭和期における足尾銅山の友子

制度	
第一節 明治三〇年代における足尾銅山の友子制度の実態	
第二節 暴動後の足尾銅山における友子制度の改編	
第三節 大正八年争議後の足尾銅山における友子制度の改編	
第四節 足尾銅山における友子制度の消滅	
第二章 大正昭和期における別子銅山の友子制度	
第一節 明治期における別子銅山の友子制度	
第二節 明治末大正期における別子銅山の友子制度	
第三節 大正十一年の鉱業所による友子制度の改編	
第四節 昭和初年の友子制度の改編	
第三章 昭和期における友子制度の変質と解体	
第一節 三菱鉱業『友子団体調査』報告の概要	
第二節 友子制度がないか著しく衰弱している鉱山	
第三節 友子組織が根強く残存している鉱山	
第四節 鉱業所の友子対策と友子の変質	
補節 北海道における戦前戦時の友子制度	
第四章 昭和期の日立鉱山における友子制度の変質と衰退	
第一節 日立鉱山における友子の歴史的概要	
第二節 昭和前期の日立鉱山における友子組織の実態と衰退傾向	
第三節 友子の活動の形骸化と一面化	
おわりに	
第五章 明治末年大正初期の奉願帳制度の実態	

第一節 奉願帳制度の概要	
第二節 和田梅吉『奉願帳』の分析	
第三節 奉願帳制度の客観的位置	
第六章 大正期における友子の労働組合化について	
第一節 全国坑夫組合の形成と友子の労働組合への成長転化	
第二節 各鉱山炭鉱における友子の全国坑夫組合支部への成長転化	
第三節 その他の鉱山での友子の動向	
第七章 戦後における友子制度	
第一節 戦後の北海道における友子制度の残存	
第二節 戦後の北海道における友子制度の基本的構造	
第三節 北海道における戦後友子の実態とその特質	
最後に	
付録資料 足尾銅山坑夫一般規約條令	
図表一覧	

III

先にも述べたが、本書は『日本の伝統的労資関係』の続編である。しかし、本書から読んでも誤解なく内容が理解できるように、序章では前著の内容と、友子をクラフト・ギルド的な「同職組合」と捉える筆者の視座がわかりやすく紹介されている。

本書の主題は、大正・昭和期、友子が再編され変質、消滅していった過程を実証的に明らかにすることにある。著者は本書の中で、友子に変化していくこととなったふたつの重要な歴史的契機を指摘している。まず日露戦後における労働運動の高揚を受けての友子政策の転換であり、もうひとつが大正9年の恐慌とそれ以後の生産様式の変化である。

第一章では、足尾銅山の事例をもとに、友子の「企業内化」（従業員団体化）が論じられて

いる。足尾鉾業所は、明治40年の採鉾夫による「暴動」を契機に、「友子を野放しにしておく方針」を改め、友子の自律性を奪おうとした。具体的には、当時、公式な鉾夫管理機構としてあった「飯場制度」に友子を編入し、「飯場頭」の監督下に置こうとした。しかしそれでもなお、友子は組織的にも機能的にも、ある一定の自律性を保ち続けた。この理由として筆者は、依然としてこの時期の企業が、熟練労働力の養成、労働の指揮管理、鉾夫の組織化、共済活動などを、独自に行いえなかったことをあげている。

しかし、大正9年の大不況を契機とした労働力の過剰化と生産の合理化・機械化により、友子の必要性は、漸次、失われていくこととなった。また、この頃から鉾夫はそれぞれ単一の鉾山に定住し働くようになり、それまでの友子の顕著な特徴であった、鉾山の枠を越えた全国的な規模での互助的交際も衰退していった。そしてこうした時代状況に加え、同時期の労働運動の高揚が、友子の「企業内化」をよりいっそう促進させることとなったという。第二章では、大正・昭和期の別子銅山における友子を対象に、友子が経営に対し親和的な企業内組織に編入せられ、「労働組合の防波堤」とされていた過程が明らかにされている（110頁）。

第三章では、昭和12年に三菱鉾業が行なった、友子に関する調査報告に基づき、昭和期の友子の実態が分析されている。ここでは、昭和期、多くの鉾山で友子が消滅し、存続していた友子も、本来の機能をほとんど失い、山内での共済を主な活動とする親睦団体に変質していた事実が確認されている。

第四章では、昭和期の友子の実像を、より具体的に明らかにすべく、日立鉾山の友子の『永代記録簿』に基づいた分析が行なわれている。昭和期の日立鉾山では、友子の対外的な活動（来山した傷病者への救済や浪人鉾夫への就職

の斡旋など）が行なわれなくなっており、山内での共済の水準も、公的な共済制度に比べ著しく低く、実際的な意義を失い象徴化していた。こうした中、友子の組織的な性格も変化し、一部の長老がボス化し組織運営に対し大きな発言力を持つようになっていったという。

第五章では、明治末から大正期における、「奉願帳」制度の実態が明らかにされている。「奉願帳」制度とは、傷病者が「奉願帳」（友子が認めた傷病者であることの証）を携え全国の鉾山を巡り、各鉾山の鉾夫が救済金を拠出しその者を助けるという友子独自の共済制度のことである。これは、友子の全国横断の性格を如実に示す活動としてあった。しかしこれもまた、大正期以降、各鉾山で、漸次、廃止されていくこととなった。本章では、あらためて「奉願帳」制度が、明治・大正期においていかなる実質的性格を持っていたのか、現存する「奉願帳」をもとに、巡回した鉾山名、それぞれで寄せられた救済金の額、寄付の形態などの詳細な分析が行われている。

第六章では、友子の「労働組合化」について論じられている。友子は、全国の鉾夫により組織される「同職組合」だったことから、企業に対する一定の自律性を持ちえていた。そしてこのことは、友子が企業の対抗勢力となり得ることを意味していた。著者はこうした友子の歴史的な性格に注目し、友子を基盤とした労働争議や全国の友子を統合して労働組合とすることを企図した「全国坑夫組合」の活動についての個別的研究を行なっている。

第七章では、戦後の友子についての分析がなされている。「同職組合」としての機能のほとんどすべてを失い、存立の基盤を失った友子は、戦時期、ほとんど消滅するに至った。この中、例外的に昭和53年まで存続した友子が、北海道の登川炭鉾の友子だった。本章では、登川の友

子の活動や組織の実態が分析され、戦後まで友子が存続した理由や背景が検討されている。筆者によれば、登川の友子は、親企業的な労組と共存・融和し、労組の左翼化・過激化を防止する役割を負うことで自らの命脈を保っていた。そして、すでに儀礼化していた諸活動を継続することで「同職組合」としての伝統を守り続けた。しかし石炭産業の斜陽化を背景に成員が減少し財政難に陥り、ついに解散することとなったという。

IV

本書を読むと、友子とひと言で述べても、鉱山の発展状況に応じて、全く異なった様相を呈していたことを理解することができる。そして、こうした友子の歴史性を明らかにしたことこそが、筆者の最大の功績と言ってよい。

旧来、友子は、史料的な制約もあり、主に大正・昭和期の断面が分析され一般化される傾向があった。特に筆者は、友子を自助的共済組織と理解する説（特に松島静雄『友子の社会学的考察—鉱山労働者の営む共同生活分析—』、1978年）に対し、友子の歴史的な位置づけを欠いていると批判してきた。そして前著において筆者は、自ら発掘・収集した友子史料をもとに、「同職組合」として成立した友子が近代鉱山業とともに発展してきた過程を明らかにし、本書では、産業構造の変化とともに友子が、「同職組合」としての機能や組織の横断的性格を喪失し、共済活動を主とした山内の親睦団体に変じていった過程を明らかにした。これによりはじめて、友子の百数十年にも及ぶ通史が提示され、友子を総合的に（各時期の友子を相対化して）解釈することが可能となった。そして、筆者の先の批判が妥当であることと、友子を自助的共済組合ではなく「同職組合」として体系的に把握することの正当性もまた裏づけられることとなったのである。この成果は間違いなく、今後

の鉱山史研究の進展に大きく寄与することとなるだろう。

最後に、本書の個別的な内容に関し評者が抱いた、いくつかの疑問を述べさせてもらいたい。

まず筆者は、友子の「企業内化」について、企業が、熟練労働力の養成、採鉱部面での労働の指揮管理、生活面での鉱夫の秩序化、共済に関する十分なシステムを確立していなかったことが友子に一定の自律性を保たせる結果を招いたとしているが、この歴史認識にはいささか違和感を覚える。

例えば、足尾銅山では、明治30年代に行われた採鉱方法の転換により、坑内労働の直接的かつ組織的な管理が促進されたということは周知のことであるし、また、明治40年の「暴動」後、古河鉱業は共済制度を拡充するのみならず、他の鉱山に先駆けて、積極的に鉱夫の「福利厚生」を図ってきたという事実がある。特に「福利厚生」は、企業が、直接、鉱夫の生活保障に携わる体制を構築することが不可欠であり、これは、鉱夫の雇用から日常生活の管理まで全てを飯場頭に担わせてきた既存の飯場制度体制の改革と、同時並行的に実施されていった（足尾銅山では大正2年の時点で、飯場頭による鉱夫への金品の貸与が禁じられており、企業が直接、鉱夫の衣食住を満たす体制が構築されている）。

友子を飯場制度の下に組み入れる「企業内化」は、むしろこうした一連の体制改革との関連で分析されるべきではないかと評者は考える。友子が自律性を維持することとなった理由についても、日露戦後の労務政策のあり方（イデオロギー、政策理念も含め）を理解し再検討する余地があるように思う。

また、鉱夫の鉱山間移動（「逃亡」や鉱夫の「誘拐」）の対策と友子政策との関連性についても、詳細に分析すべきだったのではなかろうか。前著において筆者が明らかにした通り、友子は、

鉱夫の移動を保障することで、鉱山業全体における労働力の流動性を担保してきた。筆者はこの点を、友子の労働力の供給調整機能として重視し、本書においては、大正9年以降の労働力需要の急減と移動の停滞が、友子の形骸化、「企業内化」をより促進させたとしている。しかし一方で、筆者の研究においては、鉱夫の頻繁な鉱山間移動とそれに対する企業の問題意識が、友子の「企業内化」の与件となった可能性が問われていない。これは筆者が、「全国から熟練労働力を集めるチャンネルの役割」を（前著、335頁）、企業が友子を容認した根拠と理解するためだろう。この理解に異論はないが、しかし個別鉱山レベルで見た場合、友子は熟練労働力を他に流出させる「チャンネル」となっていたことも軽視すべきでない。評者は、鉱山・企業の枠を越え成立する「同職組合」が持つこととなったこうした両義性と、それに対する企業のアンビバレンス（それが友子政策に与えた影響）に、より配慮する必要性を感じた。

そして、これは疑問と言うよりも、浅学な筆者がご教示願いたいと感じた点であるが、筆者は本書の中で、登川炭鉱をはじめとして、いく

つか炭鉱の友子を対象とした分析を行なっている。しかし、筆者が異なる産業的特質を持った鉱山と炭鉱の友子を、それぞれいかなる位置づけで把握しているのか、評者には理解できなかった。特に筆者の主張に従い、友子を、採鉱労働に関わる技能を媒体として成立した「同職組合」と理解した場合、一般的に不熟練労働者とされる炭鉱夫が形成した友子をいかに把握すべきなのだろうか。炭鉱の友子について明確に概念規定してほしかった。

以上、本書の内容を紹介し、書評と言うには拙い評者の感想を述べてきた。あらためて厳しい史料的制約にもかかわらず、長年にわたり友子と真摯に向き合い続け、本書の刊行をもってはじめて友子の通史をおおやけにした著者の功労に対し、心から敬意を表し、書評を終えたい。

（村串仁三郎著『大正昭和期の鉱夫同職組合「友子」制度—続・日本の伝統的労資関係—』時潮社、7+427頁、定価7,000円+税）

（どい・てっぺい 九州大学大学院

比較社会文化学府博士課程）

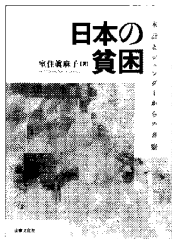
法律文化社 〒603-8053 京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71 * 価格は定価（税込）
☎075(791)7131 FAX 075(721)8400 <http://www.hou-bun.co.jp/>

日本の貧困

□家計とジェンダーからの考察

室住真麻子 著

A5判/214頁/ 3255円



所得格差や家族の多様化……社会が変動するなかで深刻化する日本の「貧困」。家庭内での家計配分に焦点を当て、これまで見逃されてきた女性や子どもの貧困の実態を解明。あるべき社会保障のあり方を探る。

目次

- 第1章 家族家計・家計内個人々人への収支配分・社会保障
- 第2章 不況下の家計消費
- 第3章 家計のジェンダー化と貧困測定
- 第4章 ジェンダーと貧困における家計分析の可能性
—経済格差と低賃金・貧困測定における個人の所得と世帯所得—
- 第5章 母親の収入と子どもの貧困防御
- 第6章 近年日本における多層的な貧困測定
- 第7章 家計・ジェンダー・福祉ビジョン